

戯曲「ゼロ年代の亡霊」

☆人物

- ・青年
- ・恋人
- ・老人
- ・刑事

○

明かりがつくと、舞台中央に畳が二畳だけ敷かれており、その上に青年が大の字になって寝そべっている。

その枕元に恋人が立っており、寝そべる青年をじっと見下ろしている。

恋人 お金、隠してるんでしょ、その下に？

青年 ……隠してるよ。

恋人 ヘソクリのつもり？

青年 （鼻で笑い）ヘソクリってのは、女がするもんだろ、普通。

恋人 でも、働いてるのは私の方だわ。

青年 ……ふん、ヘソクリなんかしてねーよ。ああ、本当は金だって隠してねーよ。

恋人 じゃあ何を隠しているの？ 畳の下はカビだらけなのよ、あまり変な物を隠さないでよね。

青年 昨日、夢枕に出てきたんだよ。

恋人 え？

青年 夢枕だよ。

恋人 夢枕、って亡霊のこと？

青年 ああ。

恋人 誰の亡霊？

青年 ……真っ白い女だった。

すると恋人、カッとなって青年へ馬乗りになり、

恋人 またロシア女を連れ込んだのね、私が夜勤なのをいいことに！

青年 いや違う、足が無かった、手も無かった、そうだ、（と恋人の頬へ手を伸ばし）丁度

こんな感じで、顔だけが提灯のようにボンワリと、

恋人は気味悪がって青年から退き、

恋人 そ、それで、どうしたの？

青年 俺は咄嗟に聞いたんだ。

恋人 何を？

青年 お前は亡霊か？ これは超常現象か？ ならば、お前は超常現象を起こす能力を持つているはずだ、って。

恋人 何それ？

青年 非科学的な亡霊の存在が確認された時点で、この世の科学の全てが否定されるんだよ。つまりは、その時点で、この世は「何でもアリ」になるんだ。だから俺は聞いたんだよ。明日のロト宝くじの当選番号を教えてください、何番だ？ さあ早く！

恋人 (呆れて) 馬鹿らしいわ。

青年 そう、そうだよ、そうやって亡霊も、うんざりした顔で消えていったんだ。多分もう二度と出て来ないだろうな。だから番号は俺が自分で考えたんだ。

恋人 番号？ じゃあ、もしかして、畳の下に隠してあるのは、

青年 そうだよ、また買っちゃったんだ。

恋人 いくら？

青年 三万。

恋人 もう知らない。

と恋人、立ち去ろうとするが、青年は恋人の足首をガツと掴む。

恋人 ちよ、ちよっと、放してよっ、もう！

青年 これがハズレたら、もう終わりだ。

恋人 (もがいて) そうよ、もうおしまいよ、私たち。

青年 終わるんだ。

恋人 そうよ、あなたの人生は、それで終わり。そして私は実家へ帰るのよ。

青年 いや、お前も終わるんだ。

恋人 どうして私が終わらなきゃならないのよ？

青年 (恋人の足首をさらに強く掴んで) この足首と、俺の足首を一緒に縛るんだ、そして、

恋人 (さらにもがいて) 誰が心中なんてするもんですか！

と上手より、ドアを激しくノックする音が聞こえてくる。

青年 (が、気付かずに) するんだよ、それだけは確かだ。

恋人 私は死なないわ！

青年 いや、死ぬ、そして亡霊に、

恋人 ありえないわ！

青年 だって昨日、夢枕に出てきた亡霊は、お前にソックリだったんだぞ！

恋人 えっ！

と、その時、上手より老人がヌツと現れる。老人は杖をついている。

青年 (老人に驚き) うわっ！

恋人 (遅れて気付き) キャーッ!

青年と恋人は、思わず畳から飛び退いた。
老人は平然と、辺りを見回している。

恋人 …… 大家さん?

青年 勝手に入ってくるなよ。

老人 (ポツリと) 家賃、三万円、そんなに高いかな。

と老人は、足を引きずりながらやって来ると、勝手に畳の上へあぐらをかいて座る。

青年 勝手に座るなよ。

恋人 家賃は近いうちに必ず払いますから。

青年 明日、当選番号が発表されるんだよ。

老人 まあ、若いうちは色々あるからな、それは仕方のないことだと思ってるさ。

青年 随分と理解があるじゃねーか。

老人 私も、かつては若かったからな。

恋人 そして私たちも、やがては年老いてゆくのね。

老人 若いうちは誰からも理解されない。それが一番の苦しみだ。

青年 それくらいで若者を知った気になるなよ。

老人 確かに雲をつかむような分からない世代ではあるが、私らもかつてはそう言われていたんだ。

青年 そうして俺らもやがては分かりやすく理解されてゆく、ってか? へっ、やなことだ。

老人 老いは絶望だと思ukai?

青年 今だって絶望だよ。人生なんて、そんなもんだろ?

恋人 そうかしら?

老人 私が一番分らないのは、そこなんだよ。

青年 あん?

老人 何で、そう、いつも冷めているのか。

恋人 それは、情熱が欠けているってことですか?

青年 クールって言うてくれよ。

老人 どうしてクールでいられるんだ? その素晴らしい若さを持っているのに。

青年 そんなことも知らねーのか、なら、あんたは何も分かっちゃいねーんだな。

恋人 (老人よりも興味を示して) え、何でよ? 教えて?

青年 俺らがいつもクールなのはな、常に自殺の選択肢を持っているからなんだよ。

恋人 (ハツとして) あなた、

青年 何か取り返しのかねーことが起きてても、死ねば全部キャラになるっつー思想が根底に流れているんだよ。だから、もう何も怖くねー、何をする必要もねーんだよ。

老人 ふふっ。

青年 ふふっ、じゃねーよ。

老人 私も常に死を考えてるよ。でも、あんたらの考えている死とは少し性質が違うようだな。

恋人 私は、自殺なんて考えたことありません。(と立ち上がる)

青年 (老人に) この部屋で死なれちゃ困るだけだろ？ それとも俺らが来る以前に、この部屋で誰か死んだのか？ なら三万は少し高いんじゃないのか？

恋人 何つまらないこと言ってるのよ、私もう時間だから行くわ。

青年 ああ、すっかり稼いでくれよ、三万のためにな。

恋人 ・・・バカ。

と恋人はそのまま上手へ退場。

が、老人はまだくつろいでいる。

青年 っていうか、あんたも出て行くんだよ！

老人 三万円払ってくれるまでは、ここは私のものだよ。

青年 あん？

老人 冗談だよ、ははっ！

青年 (舌打ち) チッ。

老人 ところで彼女はどこへ行ったんだい？

青年 仕事だよ。

老人 何をやっているんだい？

青年 百円ショップの店員だよ。

老人 あんたは行かないのかい？

青年 行ってたよ、昔は。

老人 じゃあ今は？

青年 クビになったんだよ。

老人 何で？

青年 店の商品を盗んで。

老人 ふふっ！

青年 あんたが何を企んでるのか知らねーけど、もういいだろ、とっとと下に帰ってくれ。

老人 それで、彼女に食わせてもらってるのか。

青年 今のうちだけだよ、そのうち俺が食わせてやるんだよ。

老人 そのうち？

青年 もう帰ってくれ、家賃は近いうちに、

老人 それで宝くじを買ったのか？

青年 (驚いて) 何で知ってたんだよ？ もしかして、あんた、ずっと廊下でドアに耳つけて盗み聞きしてたのか？ 最低な大家だな。

老人 (笑って) 他にやる事がなくてね。こんな私を叱ってくれる子供もないし、肩をもんでくれる孫もない。

青年 それで俺に孫になれっつてか？ お断りだよ。

老人 ……少し、肩をもんでくれないか。（と杖で自分の肩をポンポン叩く）

青年 ふざけんよ。

老人 家賃、負けてもいいよ。

すると青年は仕方なしに老人の肩をもんでやる。

老人 ……最高だ。

青年 負けるよな。

老人 最高だ。

と、青年は老人の肩をもみ続ける。

青年 なあ？

老人 うん？

青年 さっきの話だけだよ、

老人 ああ、

青年 あんたが考えてる死つてのは、一体どんなもんなんだよ？

老人 ああ、そうだな。うん、私には身寄りが無い。あるのは財産だけだ。だから私が死んで悲しむ者は一人もいない。喜ぶ者ばかりだ。

青年 少なくとも、このアパートの連中は皆そうだろうな。狂喜乱舞して、アパートごとスキップしちゃうかもな。

老人 ……私が死んでも悲しみはどこにも無い。

青年 あん？

老人 死と悲しみとは、別々のものなんだ。

青年 あん？

老人 例えば、人が殺されて、その家族や友人たちが悲しむ。そしてその悲しみを生み出した犯人の罪に対して社会は罰を下す。だが、その悲しみが無ければ、下される罰つていうのは、一体どういう意味があるのかな？

青年 それは空振りの罰だな。

老人 そうだ、空振りだよ。世の中には、そういう法を超えた不条理があるんだな。

青年 あんた、何が言いてーんだよ？

老人 例えば、その肩をもむ手を私の首に回して、きつく絞めてみたらどうだろうな？

青年 あん？（と、肩をもむ手を止めて）まさか、あんたも自殺志願者なのか？

老人 少し、やってみてくれないか。

青年 へへっ、冗談は止してくれよ。

老人 私が死んで悲しむ者は一人もいないよ。家賃三万円も浮くし、いや、それどころか、私の部屋に隠してある財産も手に入れることが出来る。私は銀行が嫌いだからな。

と老人は、肩をもむ青年の手を熱く握る。

一瞬、凍りつく青年。

青年 よ、止してくれよ・・・

老人 この畳の下に宝くじを隠しているんだろ？ でも、私の部屋の畳の下には一等賞金の現金が隠してあるんだよ。宝くじの幻想などではなく、感触のある本物の札束だ。

老人は青年の手を熱く握ったまま放さない。

青年 その手を放してくれよ・・・

老人 あんたの夢は何だ？ その為には、やはり金が必要なんじゃないか？

青年 ああ、夢はある、夢はあるよ。だがな、人には言わねーよ。それを口に出した時点で全てが砂の城のように砕けて、何もかも叶わなくなるような気がするんだよ。だから小学生の頃から夢を書く作文ではいつもサラリーマンって嘘を書いてたんだ。それを読んで大人たちは嘆いていたが、俺は、夢を軽々しく聞いてくるそんな大人たちを軽蔑していたんだ。

老人 それが、あんたの言うところの美学かい？

青年 芸術、って呼んでくれよ。

老人 自分の才能の無さに気づき、その不足を埋めようとする作業が芸術活動なんじゃないのか？

青年 誰が、才能が無い、だって？

と青年は、いつのまにか老人の首に腕を回してホールドしている。

老人 私の夢は、鳥に食われることだ。

青年 あん？

老人 鳥葬だよ。人はさんざん生き物を食ってきたんだ。最後くらいは食われて終わりたいのだよ。死んだら燃やして灰にするなんて、他の生き物に対してアンフェアだと思

わないか？ 傲慢だよ。

青年 傲慢？

老人 そして不条理だ。

青年 じゃあ、これはどうなんだ？ 不条理か？

と青年は、腕に力を込めて老人の首を絞め上げる。

老人 あ、ああ、これは、決して、不条理では、ない、よ・・・

青年の呼吸が徐々に荒くなる。

一方、老人はあぐらをかいたまま、ゆっくりと目を閉じる。

そうして明かり、次第に落ちてゆく。